

ノコギリ屋根工場のあるまち 桐生

～歴史が紡ぐ産業美学～

桐生市に残る220棟余りのノコギリ屋根工場群、それらは「西の西陣、東の桐生」とまで言われた桐生の織物産業を象徴するものです。地場産業が息づく緑豊かな産業都市・桐生に存在するノコギリの歯のような屋根が連続する特異な工場建築物、最近ではアーティストの工房やベーカリーカフェ、洋菓子店など全く新しい活用が増えているとはいえ、織物業が現役で動いている工場は数多くあります。

変遷する産業社会の中で、変わらずにノコギリ屋根工場で連綿と織られ続ける織物、そこには伝統的な技術と革新性、匠の技が加わり、見事な伝統的工芸品が創り出されます。桐生の産業観光の主流となるノコギリ屋根工場と伝統的な桐生織物を～歴史が紡ぐ産業美学～をテーマに全国に発信します。

桐生商工会議所

桐生市のノコギリ屋根工場の特徴

ノコギリ屋根は、イギリスの産業革命の進展に伴い発達した繊維産業のなかで、織物工場の建物として考案された屋根構造であり、日本では明治10年代末に使われ始めた。おもに、織物や紡績工場などに採用され全国的に普及していった。「鋸の歯に似た形をした屋根をいい、歯形の傾斜部分から採光する」ように出来ており、織物や染色工場などに広く用いられてきた。おもに北側屋根から採光され、一日中変動の少ない明るさの均一の光を工場内に取り入れることができる。また、背の高いジャカードの機械やそれを動かす動力を伝達するシャフト(回転軸)を取り付けるのに合理的な天井高が要求され、室内には柱が少なく、広い大きな空間になっている。最近では、この利点を活かし、芸術家のアトリエや工房、美容室などに再活用されるケースも増えている。

その一方で、所有者の高齢化が進み、建物の維持管理が困難な状況にあるうえ、一昨年の東日本大震災で傷んだ建物の解体が加速する傾向にあり、保存、活用の推進が急務となっている。

